

チベット仏教研究のススメ

大谷大学 福田洋一

2012年2月17日・駒澤大学大学院仏教学研究会公開講演会

2012年2月21日・ブログ用に修正

1

* 本日の講演の主旨

- * インド仏教を研究するためにチベット仏教を研究するにはどうしたらいいか。
 - * 利点
 - * 欠点
 - * 方法
 - * 具体例
 - * アドバイス

2

* インド仏教研究とチベット仏教研究

- * チベット仏教はインド仏教の延長線上にある
- * 国民性や文化的状況、言語の違い
- * 古典研究としてのインド仏教と現在も伝統を受け継いでいるチベット仏教
- * インド仏教の原典研究・解釈の蓄積としてのチベット仏教

3

* インド仏教を研究するに際して、チベット仏教の持っている利点

- * 制約はあるが翻訳が概ね忠実である
- * 特に大乘の論書・密教に関して他の言語のものよりも多くの文献が残されている
- * 代表的な原典には多くの注釈書が書かれている
 - * 語句の逐語的な注釈、文脈についての議論、詳細な科段、体系的な理解

4

- * インド仏教の解釈としてのチベット仏教の欠点
 - * サンスクリット語とチベット語が一对で訳されていない。
 - * 翻訳の出来不出来がある。
 - * 言語構造が異なるので、サンスクリット文のニュアンスを正確には再現できない。
 - * インドの原典に由来しないチベット独自の概念や用語法、表現方法で記述されることがある。

5

- * どのような方法が推奨されるか
 - * チベット語の注釈書をチベット語として正確に理解する。
 - * 科段も原典の解釈として有効である。
 - * チベット仏教の中でのコンテキストで理解する。
 - * 注釈書を遡り、解釈の妥当性を検証していく。
 - * チベットでの先行する注釈書とインドの注釈書および元々の原典

6

- * 論理学の重要性
 - * チベットの僧院の教育は、基礎的な論理学の学習から始まる。→ドウラbsdus grwaと呼ばれる教科書
 - * 問答法あるいは論証式の形式に習熟する。
 - * 基礎的、汎用的な仏教用語の体系的な理解と定義の記憶と応用
 - * 抽象的な概念を積み重ねた命題を操作する概念的思考力の養成

7

- * チベット人僧侶の学習方法
 - * ドウラを勉強したあと、中観（『入中論』）、般若（『現観莊嚴論』）、阿毘達磨（『俱舍論』）、論理学（『プラマーナ・ヴァールティカ』）、律（『律経』）を学習していく。
 - * その際、基本となる原典を全て暗記し、さらにその標準的な注釈書に付せられた科段も全部暗記する。
 - * 理解を確かなものとするため、様々な概念や命題を級友あるいは先生との間で問答法で確認していく。

8

- * チベット仏教の独特の概念を学ぶ
 - * おそらくチベットで発達したと思われる概念について知る必要がある。
 - * その一つの例としてmtshan nyid (特質)、mtshon bya (名称・概念=言説)、mtshan gzhi (主題)を取り上げる。これらはそれぞれldog pa (他のものからの差異)に関する三つ組みの概念、don ldog、rang ldog、gzhi ldogとも言い換えられる。

9

- * チベット人が書いたものは、チベット語の文脈でチベット語として正確に読む必要がある。そういう意味でのチベット語の読解法や文法は確立されていない。
- * サンスクリット語と対応がある場合と、ない場合がある。サンスクリット語では異なった語がチベット語では同じ語で訳されていることもある。
 - * pratibandha→'brel ba、rag las pa
 - * 'brel ba → sambandha、pratibandha

10

- * チベットの注釈を遡り、インドの注釈や原典をどのように受容しているかを明らかにする
 - * チベットの注釈も科段も、ほとんどはインドの注釈書などに典拠が見られる。
 - * 発展的議論については、インドでの議論を引き継いでいるものと、チベットの中でのみ議論が行われてきたものがある。
 - * チベット仏教の理解を検証していくことによって、原典の理解を深めることができる。

11

- * チベット語の学び方
 - * 独学は無理。信頼できる訳がない。文法書もなく、文法だけで読めない。
 - * 適切な指導者に指導を受ける必要がある。最低3年間、100回以上の講読が必要。
 - * ドウラを学ぶ必要がある。これもテキストを一人で読むだけでは書いていないことが多すぎて理解できないので、指導者に指導を受ける必要がある。

12

* チベット人僧侶に質問をする注意点

- * チベット人ゲシェー（博士に相当）は我々よりもはるかに博識であり、知識に揺るぎがないので、指導を受けることは有効である。
- * ただし、自分でぎりぎりのところまで考え理解をし、その理解（解釈）を確認するために質問する。
- * チベット人の考え方、論証方法を踏まえて尋ねる。その流れを阻害すると、お互いを理解できないまま、有効な教示を得ることができない。

13

* 考えられるテーマ

- * ゲルク派の教育カリキュラムで学習される『入中論』、『現観莊嚴論』、『プラマーナ・ヴァールティカ』のほか『中論』、『入菩提行論』、あるいはツォンカパの著作にも多くの注釈書がある。これらにはインドでの注釈も多い。それらを歴史的に比較して行くことで、理解を深めることができる。
- * 比較することが大事なのではなく、理解を深めることが重要であることを忘れないように。

14